

# みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ポリネシアのビーチコウマー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 榮吉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001606">https://doi.org/10.15021/00001606</a>

## 5 ポリネシアのビーチコウマー

- |   |  |
|---|--|
| 5 ポリネシアのビーチコウマー   | 5.3.2 エドワード・ロバーツ<br>(Edward Robarts, 1771? - 1832) |
| 5.1 ビーチコウマーとは   | 5.3.3 ウィリアム・マリナー<br>(William Mariner, 1791-1853)   |
| 5.2 伝説のビーチコウマー  |  |
| 5.3 ポリネシアのビーチコウマー                                       |  |
| 5.3.1 ピーター・ハゲルシュタイン<br>(Peter Hagerstein, 1757? - 1810) | 5.4 むすび  |

### 5.1 ビーチコウマーとは

オセアニア研究者をのぞいて、一般にはあまり馴染みないと思われる言葉の一つに、ビーチコウマーという英語がある。適切な訳語が見つからないままに、研究者のあいだでは原語のまま使用されるのが常である。

ビーチコウマーとは何なのか。かつて私は次のように解説したことがある。少し長くなるがここに再録してみる。

ビーチコウマー (beachcomber) の訳語を辞書でみると「(特に南太平洋諸島の) 波止場をうろつく浮浪白人」『研究社版新英和大辞典』などとある。まるきりまちがいのわけではないが、辞書ということの制約から、説明不足を免れない。以下、少し長くなるがビーチコウマーを説明しておく。

太平洋諸島の存在がヨーロッパ人のあいだに知られるようになった16世紀の20年代以降、太平洋の島々には、ときおり島民社会にまぎれこんだ白人の姿がみられるようになった。太平洋を航行する欧米船の難破漂流者や、欧米船からの脱走者、島に置き去りにされた者、島民に拘留された者、あるいは船長の許可をえて島に残留した者など、その理由はさまざまである。こうした欧米船からの離脱白人を一般にビーチコウマーと称する。その数は16~17世紀の間は比較的少なかったが、太平洋の捕鯨やアザラシ猟、白檀やナマコの貿易が盛んとなる18世紀の後期から19世紀の前半にかけては、「ビーチコウマーの時代」と呼んでさしつかえないほど、その数が増大する。たとえば、ハワイ諸島だけで、1790年代から1820年代にかけて200人ものビーチコウマーがいたといわれる。その多くは、当時の過酷な船乗り生活に嫌気がさし、島の生活に憧れて船を脱走した水夫たちであった。

しかし、現実の島の生活は必ずしも容易でなく、島民社会になじめずにかえって孤独感にさいなまれ、たいていのビーチコウマーがわずか数ヶ月間で再び島を脱出している。数年にわたって滞在したものは少数であり、永住したものにいたってはっそう少ない。

島でのビーチコウマーの境遇はさまざまで、島民に奴隷あつかいされたものから、ハワイのカメハメハ (Kamehameha) 大王の軍事・政治の顧問となって優遇されたジョン・ヤング (John Young) とアイザック・デーヴィス (Isac Davis) や、トンガの一首長フィナウ (Finau Ulukalala II) の養子となったウィリアム・マリナー (William Mariner) のような幸運のものまである。

ビーチコウマーが宣教師や貿易商人など、なんらかの目的をもって島に滞在した白人とともとも異なる点は、島民の生活に干渉せず彼ら自身が島民の生活慣習に従い、ときには島民になりきろうとしたことである。しかしそれにもかかわらず、彼らは島に立ち寄る欧米船の水先案内や薪水補給の斡旋、貿易の仲介、通訳などをつとめることにより、二つの異質な世界の文化交流、とくに島民の側の文化変化に手を貸してきた。彼らは大なり小なり文化のブローカーであったということが出来る。

なお、ビーチコウマーは、もと欧米船からの離脱白人のみを指していたが、太平洋諸島民が欧米船の水夫などに雇用されるようになると、島民自身がビーチコウマーとなるばあいもでてきた。そうしたばあいには、期せずして太平洋諸島間の文化や情報の伝達に、彼らが一役を果たすことにもなったのである (石川 1992: 127-128)。

拙著『日本人のオセアニア発見』(1992年刊) でビーチコウマーの出現について述べたが、今読み返してみると、少なくとも次のふたつの事実を加筆しておいたほうがよいと思う。

ひとつは、ビーチコウマーの地理的分布の濃淡についてである。ビーチコウマーは太平洋のあらゆる地方にみられたが、その分布は決して均等ではなく、ポリネシアに最も多く、反対にメラネシアに最も少なかった。これは、ヨーロッパ人が太平洋に乗り出してきた当初、ポリネシアがヨーロッパ船の最もしばしば立寄った地域であったことに加え、ヨーロッパ人の目から見て、ポリネシア人の容姿はヨーロッパ人に馴染みやすく、メラネシア人はその逆の印象を与えた、という事情もある。メラネシア人はその肌の黒さばかりか容貌からも、当時のヨーロッパ人には獰猛の感を抱かせたのである。

その二は、ときとしてビーチコウマーが遺した記録 (自伝など) の民族誌資料としての価値である。もちろん、ビーチコウマーの体験自体が歴史史料たりうるものであるが、もし彼が彼の置かれた島社会の仕組みや文化 (風俗・習慣) についてまで触れているとするならば、それは貴重な民族誌資料である。一過的な航海者や貿易商人、あるいはみずからを島民より高みに置いて島民に臨んだ宣教師や官吏とは違って、ビーチコウマーは島民社会に融けこんだ存在であったから、島民の社会と文化についての彼らの見聞はより信頼度が高いと考えられるからである。後述するウィリアム・マリナーのトンガ諸島についての報告は、その代表的な一例である。

太平洋諸島民についての科学的な、つまり人類学的・民族学的調査研究が始まるのは、

19世紀末以降のことであり、それまでにはすでに島民社会も文化も、地域による違いはあるにせよ、かなり欧米人の影響を受けて変容していた。伝統的な社会・文化がほとんど崩壊に瀕している場合さえあった。そうした変容を蒙る以前の姿を復原しようと企てる時、ビーチコウマーの伝える情報が、きわめて重要な手がかりとなったのである。

オセアニア史のうえでも、オセアニア民族学にとっても、ビーチコウマーはけっして無視してよい存在ではない。

## 5.2 伝説のビーチコウマー

われわれにはピンとこないことであるが、欧米の一般の人びとのあいだでは、ビーチコウマーといえば、欧米人が野蛮と思い込んだ島の住民にさえ逆に恐れられた無頼の徒であるか、あるいは、島の政事に介入して一方の首長の権力奪取もしくは勢力拡大に貢献し、その功によって栄華を極めた英雄であるかの、どちらかのイメージで語られることが多いようである。

こうしたイメージはまるきりの仮想というわけではない。たとえば、1809年から1810年にかけて約13ヶ月をハワイのオアフ島に過ごしたビーチコウマーのイギリス人、アーチボルト・キャンベル (Archibald Campbell) によれば、彼の滞在中約60人のビーチコウマーがオアフ島にいた (Campbell 1967)。うち、およそ40人がアメリカ人で20人はイギリス人であった。そのイギリス人中6~7人はニューサウスウェールズ (オーストラリア) からの脱獄囚人であった。これらのビーチコウマーの多くは怠惰・放埒で、酔いどれていることの多い無頼の徒であったという。当時のハワイはカメハメハによる群島の政治的統一が完成したばかりの、ハワイ王国の建設期に当たる。

この話は、キャンベルがイギリスに帰国後、1816年に出版した彼の著書の中に見えるところである。同書には、当時オアフ島にいた約20名の英人ビーチコウマーの一人として、アイザック・デーヴィスの名をあげている。デーヴィスの僚友ジョン・ヤングについての言及はないが、デーヴィスとヤングの両人は、無頼の徒の多いビーチコウマーの中にあっては珍しいまともな人物で、カメハメハの信頼も厚く、彼の相談役としてハワイ王国の建設に貢献するところ少なくなかった。

デーヴィスはキャンベルがハワイを離れた同じ1810年に、政敵による毒殺というもっぱらの噂のうちに生涯を閉じたが、ヤングとその子孫は、長くカメハメハ王朝において枢要な地位を与えられて優遇された。ヤングは土地の女性と二度結婚したが、最初の妻の死後再婚した相手はカメハメハの姪であり、彼自身がオアフ島やハワイ島の知事を務めたほか、のちには彼の次男カネホア (Kanehoa) もマウイ島とカウアイ島の知事を歴任し、三男ケオニ・アナ (Keoni Ana) はカメハメハ三世の時代に総理兼内務大臣に任じられている。そればかりではない。次の時代になると、ヤングの孫娘エムマ (Emma) がカメハメハ四世の王妃に迎えられているのである。

ついでながら、ベリー提督に強要されて開国に踏み切った徳川幕府が、安政5（1858）年に締結した日米修好通商条約の批准交換のために初めてアメリカに派遣した、いわゆる万延元年遣米使節の面々は、往路ハワイに立寄った際、カメハメハ四世とエムマ王妃とに拝謁している。その折、使節たちはエムマの美しさにひどく心を動かされたとみえ、たとえば使節団の副使村垣淡路守範正はその日記に、王妃は「名はエンマ、年ごろ二十四、五、容顔色は黒しといへど、品格おのづからあり、両肩をあらはし、薄ものをまとひ、乳のほとりをかくし、腰のほうより末は美敷錦うつくしきの袴よふのものをまとひ、首に連りたる玉の飾ありて、生けるあみだ仏かとうたがふばかり」（村垣 1960: 83）と、エムマ容姿を絶賛している。

ビーチコウマーの中でジョン・ヤングのような例は稀である。それにもかかわらず、これに類したビーチコウマー像が大衆の心の中に一般化したのは、冒険的な英雄談を好む大衆心理に迎合して生み出されたビーチコウマー伝説のためである。

その代表的なものがチャールズ・サヴェージ（Charles Savage）に関する物語である。その物語は細部をいろいろと異にしながらも、オセアニアについて書かれたさまざまな史書の中に取りあげられている。たとえば通常フィジー史の最も信頼できる資料源と目されているメソジストの伝道師トーマス・ウィリアムズの著書『フィジーとフィジー人』（1858年刊）の中で、サヴェージは次のように描かれている（Williams 1982）。

1804年ころ多数の囚人がニューサウスウェールズ（オーストラリア）から脱走して、フィジー諸島に渡来した。これら無法者の多くは群島の主島ヴィティ・レヴの東南部のパウカレワに住み、土地の首長に加担して島民間の抗争に介入し、その恩賞として自制的のない放縦で傍若無人の生活を許容されていた。彼らのもつ火器が彼らの横暴の源泉であった。彼らにさからう者ばかりか、ただ、彼らの気に入らぬというだけの者でさえ、容赦なく射ち殺された。島民たちは彼らを怪物と見なして怖れた。

こうした無法白人は当初27人を数えたが、彼らが加担した島民同士の戦いや、仲間同士の争いによって、数年内にその多くが命を落としてしまった。サヴェージという名の一スウェーデン人が白人たちの頭目と目されていたが、彼もまた1813年にちょっとした油断から敵がたの島民に捕らえられ、水に漬けて溺死させられたうえ、その肉を食われてしまった。

ウィリアムズ師がフィジーに滞在したのは1840年から53年までで、サヴェージの死後30年ほどしてのことである。したがってウィリアムズ師は伝承としてサヴェージのことを聞き知ったにすぎない。同様に、サヴェージについて書かれたものはほとんどすべて、彼の生きていた時代から10数年ないし100年ものちの人びとの手になるものであって、不確かな伝承に依拠したものばかりである。中にはむしろ創作と呼んだほうがよさそうなものさえある。

こうして、さまざまな形の「サヴェージ伝説」が作られてきたが、その骨子はおおむ

ね次のように要約されよう。

サヴェージはスウェーデン人で、かつてアザラシ猟の獵人であった。

のち、アメリカのブリッグ船（2本マストの横帆船）エリザ号の水夫となるも、この船はフィジー諸島のナイライ環礁で難破。1808年のことである。

やがて彼は、当時のフィジーの強力な首長国の一つであったパウの最高首長ナウリヴォウ（Naulivou）の庇護下にはいった。彼がマスケット銃をもち、その威力がナウリヴォウに高く買われたためである。

フィジーに火器を初めて持ち込んだのはサヴェージである。

マスケット銃によってサヴェージは、パウ首長国が全フィジーに卓越した強大国となることに貢献した。

その功によって彼は、最高首長に次ぐ権力の座につき、30人もの妻をめとることを許された。妻たちのある者は、非常に高い身分のものであった。

1813年にサヴェージは、ヴァヌア・レヴ島のワイレアで、白檀貿易業の白人とフィジー一人とのあいだの紛争に巻き込まれ、6人の島民に捕らえられて水中に逆さ吊りにされ、溺死した。死体は直ちに手足を切断されて料理され、当時食人族であった島民たちに喰われてしまった。その骨はカヌーの帆を縫う針に加工された。

この伝説には難破船の漂流民が島に初めて火器をもたらし、そのおかげで島の一勢力にすぎなかった一首長国の権勢を全島に冠たらしめたばかりか、彼自身も権勢をほしいままにし、それにもかかわらず非業の最期を遂げるといふ、まさに大衆好みの波乱万丈の冒険譚の諸要素が具わっていると言ってよからう。ビーチコウマーのイメージ形成には、「サヴェージ伝説」の寄与するところが少なくなかったのである。

しかし、伝説はおおたの伝説がそうであるように、断片的に真実を含むことはあるにしても、決して真実そのままを伝えるものではない。「サヴェージ伝説」もその例に漏れない。

近年アデレード大学歴史学講師のイアン・C・キャンベルが史料批判の立場から、サヴェージについて書かれた各種文献を比較検討した末に、「サヴェージ伝説」が史実からほど遠いことを明らかにした（Campbell 1980）。彼がエリザ号の漂流民であること、そしてパウ島の最高首長に多少とも好遇されたことは事実のようであり、また、その死の模様も真実を伝えていると言ってよいが、彼がフィジーに初めて火器をもたらしたとか、パウ首長国をフィジーの覇者たらしめたとか、彼自身が権力をほしいままにしたとかいうことは、すべて後人の創作でないまでも憶説にすぎない。つまり実証的根拠が無いが、これまでにすでに明らかにされている史実と矛盾するのである。

ただサヴェージの死の経緯については実証がある。1788年1月にオーストラリアのポタニー湾に立寄って以降、忽然と消息を絶ったフランスの探検航海者ラペルーズの2隻の探

検船の遺品を、約40年後の1817年にサンタクルーズ諸島のヴァニコロ島に発見し、太平洋の探検史上有名な「ラペルーズの謎」を解いたことで名をなしたイギリスの探検航海者ピーター・ディロンが、サヴェージュの死を目撃し、彼の著書の中でそのことに触れているからである。しかし、ディロンは、サヴェージュを当時パウ島にいた白人たちの一人として記述しているだけで、彼が特別の権力を誇る英雄であったとは毛頭語っていない。これはキャンベルが述べるところであって、私自身はディロンの著書を直接披見することができなかった。

### 5.3 ポリネシアのビーチコウマー

さきに述べたように、ビーチコウマーはポリネシアに最も多かった。そのポリネシアのビーチコウマーのうち、自伝を残しているか、あるいは第三者の記録の中に比較的よく姿をあらわすかして、その所業のとらえやすい何人かをここに取りあげてみることにしよう。ビーチコウマーを全体として見たとき、そのような存在はむしろ稀有で、大多数のビーチコウマーは、名前さえも知れないのである。いわば、「その他大勢」である。資料的には恵まれてその存在と所業のあらましが確認される何人かを取りあげることにより、伝説ではないビーチコウマーの実の姿と、彼らが太平洋の「開拓」史上に演じた役割がどのようなもので、どの程度のものであったかを、眺めてみようというわけである。ハワイのビーチコウマーで最も有名なジョン・ヤングとアイザック・デーヴィスとについては、さきに触れたので、ここで再度採りあげてをしない。

#### 5.3.1 ピーター・ハゲルシュタイン (Peter Hagerstein, 1757? - 1810)

タヒチ島の存在がヨーロッパ人に知られるようになったのは、1767年サミュエル・ウォリスを艦長とするイギリス軍艦ドルフィン号が、この島の北岸に位置するマタヴァイ湾に投錨したときをもって端緒とする。その翌年には、ブーゲンヴィルを艦長とするフランス艦ブードーズ号が、東岸のヒティアアに碇泊。さらにその翌年(1769年)には太平洋探検の立役者ジェームズ・クックの指揮するエンデヴァー号が立ちあらわれた。

このクックの下で、彼の第2回、第3回太平洋探検航海に随行して太平洋の海況と地理に馴染み、1791年以降エンデヴァー号艦長に任ぜられたジョージ・ヴァンクーヴァーが、1791年末から92年の1月末近くまでマタヴァイ湾に停泊した。そのすぐあと、イギリスの小さな捕鯨船マテルダ号が休養のためにマタヴァイ湾にはいり、暫時ここに滞留した。このあとこの捕鯨船はツアモツ諸島のリーフで座礁したため、船長以下乗組員は苦労の末、タヒチに舞い戻った。彼らは持物のすべてを島民に奪われはしたものの、それ以外には不当な扱いを受けることなく、むしろ島民たちに好遇されたといつてよい。

マテルダ号の乗組員たちにとって幸運なことには、彼らがタヒチ島に難を逃れて上陸して以後、ほんの1~2ヶ月間に相次いでイギリス船がマタヴァイ湾を訪れ、彼らを救出

してくれたのである。

まず1792年の3月に、プリンス・ウィリアム・ヘンリー号とジェニー号という2隻があらわれ、2～3日碇泊したのち、マチルダ号の数人を連れ去った。

その翌月には、南海の探検史上有名なバウンティー号の叛乱事件の被害者として、これまた広く名を知られたウィリアム・ブライ船長指揮下のプロヴィデンス号とアシタンス号の2隻がマタヴァイ湾に投錨し、両船は3ヶ月余をここに過ごした。さきに叛乱者によって略取されたバウンティー号と共に失われたパンの木の苗木を、再度採集して西インド諸島へ運ぶためであった。この両船もまたマチルダ号の残留者数名を連れ去った。

最後に、翌1793年2月、ヴァンクーヴァー隊の補給船ディーダラス号がほんの数日間マタヴァイ湾に碇泊し、マチルダ号の残りの一人を収容して去った。しかし、マチルダ号の全員がこれで収容され尽くされたわけではなかったし、ディーダラス号からも脱船者が出ていた。彼らはビーチコウマーとなり、その4年後から始まるタヒチのキリスト教化とポマレ王朝によるタヒチの政治的統一、そしてタヒチとヨーロッパ世界との交渉のうえに一役を演ずることとなるのである。

ディーダラス号が去ってのち暫くの間は、ヨーロッパ船の来航が途絶えた。次に姿を見せたヨーロッパ船は、南海の異教徒の教化を目的にロンドンに設立されたロンドン伝道協会が派遣したダフ号であった。マタヴァイ湾に投錨したのは1797年3月のことである。

ダフ号には30人の伝道師が乗っていたがそのうち聖職者は4人だけで、他は信仰厚い職人たちであった。彼ら30人のうち18人がタヒチに上陸して伝道に従うこととなった。ついながら、残りの伝道師たちは、それぞれトンガタブ島（トンガ諸島）に10人、タフアタ島（マルケサス諸島）に2人投入された。しかし、タフアタ島の2人はともに島の生活に怖れをなし、一人は一夜でこりごりしてダフ号に逃げ戻り、他の1人は辛うじて一年間頑張ってみたものの、結局は耐え切れずに、たまたま立寄った捕鯨船に便乗してポートジャクソン（シドニー）へ去った。マルケサスでの布教は完全に失敗に終わったのである。

トンガでも似たようなものであった。当時トンガにいた数名のビーチコウマーに妨害されて布教どころではなく、伝道師の1人は信仰を捨てて彼自身が島民になってしまい、3人は内戦に巻き込まれて殺され、残りの6人は島民教化どころか却って島民の頼使に身を委ね、終いには1800年の初めに来航したイギリス船に逃げこんでこれまたシドニーへと去ったのであった。

タヒチではどうであったろうか。

ここでは当初から島民は友好的であり、ビーチコウマーも妨害的ではなかった。しかし、だからといって宣教が順調にはかどったというわけではない。まず言葉が問題であった。言葉を介さずに布教活動を進めることはできない。キャプテン・クックの部下の中には、ヴァンクーヴァーをはじめタヒチ語に習熟していたものもいなかったわけでは

ないが、ダフ号のスタッフの中には彼らの誰も含まれてはいなかった。また、タヒチ人の中で一時期クックと行を共にし、そこそこ英語を解したオマイ (Omai) はすでに1784年に死去していたし、オディディ (Odidi) は1792年にブライに従って西インド諸島へ旅立っていた。言葉の上で頼りになるのはビーチコウマーしかいなかった。

さきに述べたように、その頃のタヒチにはマチルダ号とディーダラス号からの脱船残留者が数人いた。その中で伝道師たちといちばん交渉の深かったのがハゲルシュタインである。彼は当時スウェーデン領であったヘルシンキ (現・フィンランドの首都) 出身のスウェーデン人で、ディーダラス号から脱船して、1793年以来タヒチのビーチコウマーとなり、ダフ号来航時にはすでに4年をこの島に過ごしていたので、タヒチ語に不自由はなかった。彼が乗務していたディーダラス号はイギリス船であるから、英語にも熟達していたので、伝道師たちにとってハゲルシュタインは恰好の通訳であった。彼はまた、その頃マタヴァイ湾地方を支配していた首長ポマレ二世 (Pomare II) の庇護を受けていたので、この点も好都合であった。実はポマレ家は、もとはマタヴァイ湾より東方に位置するバレ地区の大首長の家柄であったが、1773年クックが第2回太平洋探検航海でタヒチを訪れた頃には、その勢力がマタヴァイ湾地方にまでおよんでいた。それでクック隊への食料供給は、ポマレ大首長 (もとの名をツ (Tu) という) が一手に担うこととなった。クックは彼をタヒチ全島の王であると誤解し、この誤解はダフ号にまで引き継がれていた。

ダフ号の来航時には、ツの息子のポマレ二世に首長位が引き継がれていたが、「タヒチ全土の王」であるポマレ二世に接近することが布教の捷徑 (はやみち) であり、その庇護下にあるハゲルシュタインを通訳にえることは、ポマレ二世の理解をえるうえでの最高の便宜と考えられたのである。

ダフ号の船長ジェイムズ・ウィルソンの記録するところによると、ダフ号がマタヴァイ湾に投錨し (1797年3月5日)、さてどうしたものかと思案しているとき、2人の白人がカヌーでダフ号に漕ぎ寄せてきた (Wilson 1799)。彼らは島民のように褌だけを身につけ、腕と脚に入墨をしていた。彼らを船室に招き入れて問いただしたところ、2人ともスウェーデン人で、若いほうは30歳位、ストックホルム生まれで、アンドリュウ・コルネリウス・リンド (Andrew Cornelius Lind) と名のり、難破したマチルダ号の生き残りの1人で、1792年以来この島に居るといふ。リンドより年長で40歳ぐらいに見えた他の1人がピーター・ハゲルシュタインであった。ウィルソン船長は早速に2人に通訳兼案内役を期待している。

実際、ハゲルシュタインはほどなく、船長の甥でダフ号の首席航海士をつとめるウィリアム・ウィルソンの通訳に雇われて、彼のタヒチ一周旅行を案内している。

しかし、布教が順調に進んだわけではなかった。伝道師たちは彼らの来島の目的だけはなんとかハゲルシュタインの通訳でポマレをはじめその地方のおもだった連中に説明

はしたものの、彼らはキリスト教に何の関心も示さず、ビーチコウマーたちもこの点では必ずしも協力的でなかった。

ダフ号来航の翌年、ノーチラス号という交易船がマタヴァイ湾に入った。タヒチ産の豚を購入するためであった。1788年に始まるイギリス人のオーストラリア大陸入植は、ポートジャクソン（現シドニー）を中心とする今日のニューサウスウェールズ州にまず根を下ろすが、この地方は土地が痩せていて食糧を自給できず、しかもブルー山脈に阻まれ内陸へも進出が叶わなかった。それで、ニューサウスウェールズの最初のフロンティアは、内陸ではなくて太平洋に向けられた。タヒチにはたくさんの豚が飼育されているという情報をえて、まず豚肉を得るための貿易船が次々とポートジャクソンを出帆していった。ノーチラス号はごく初期のそうした豚買い船であった。

当時のタヒチには互に政治権力と宗教的権威を競い合う小さな首長国が林立して、抗争の絶え間がなかった。クック以来ダフ号の宣教師たちにいたるまで、「タヒチ王」と誤解してきたボマレ家も、実はそうした一首長国の支配者にすぎなかったのである。

そうした首長国のそれぞれが、たとえば豚のような食料や薪水を供給する見返りとして求めたものは、銃砲弾薬といった、タヒチ社会がこれまでもたなかった新しい武器類であった。ダフ号で来航した宣教師たちは、平和の使徒として当然のことながら殺人兵器の氾濫を認めるわけがない。彼らはノーチラス号の船長に島民に火器を売らぬよう要請した。激怒したボマレをはじめとする島民たちは、これまでと態度を一変させて、宣教師たちを迫害し始めた。身の危険を覚えて11人の宣教師がノーチラス号に逃げこみ、彼らは布教を断念してそのままシドニーへ去った。このすぐあとには、2人の宣教師がやはり棄教して、タヒチ女性と手を取りあって布教キャンプ地から姿を消してしまった。タヒチに上陸した18名の宣教師のうち、残ったのは5人だけになってしまったのである。

この間、ハゲルシュタインはどうしていたのか。詳しいことは判らないが、彼はもっぱらボマレ二世に忠誠を捧げ、ボマレ家のために内戦を戦うことはあっても、宣教師に協力することはほとんど無かったようである。彼はタヒチの豚貿易のうへで顕著な働きがあったとして、ニューサウスウェールズ側からは大いに感謝されているし、確かにタヒチと外来者とのあいだの仲介者の役割を演じたことは間違いないが、これとてもハゲルシュタインにしてみれば、豚の見返りにボマレ家のために銃砲火器を入手することこそが目的なのであって、なにもニューサウスウェールズの白人たちの食糧難を救うことを意図しての行動だったわけではない。ニューサウスウェールズの豚貿易船は、ハゲルシュタインが1810年に死去するまでのあいだ、ほぼ毎年少なくとも1隻は買い付けに来航した。1807年から1820年の半ばまでに、平均年3隻の豚買い船が来航し、この13年間におよそ300万ポンドの塩蔵豚肉をニューサウスウェールズに運んだ、と述べている文献もある。そのすべてがハゲルシュタインの差配のもとに、もっぱらボマレ家と取り引きされたのである。

ハゲルシュタインの死後、1817年から22年まで、ロンドン伝道協会の伝道師としてタヒチに滞在したウィリアム・エリス師は伝道師仲間から聞き知った情報として、ハゲルシュタインは無教育で、不徳義で、不品行な人物であり、そのうえ彼が止宿しているポマレ二世からの伝言があるとき以外はほとんど宣教師に近づかなかった。宣教師の通訳を引き受けたにしても、宣教師の意を故意に歪めないまでも、しばしば非常に誤って伝えたであろうことは間違いない、とその人物を酷評している (Ellis 1842)。

そして、彼が油断のならぬ危険人物であったことの証として、次のような話をあげている。

ポマレ二世はすでにキリスト教に改宗した晩年 (1812年) になって、ダフ号で来島した宣教師のうち、自分の身の危険を顧みずに最後まで逃げ出さず、常にポマレ二世につき従った唯一人の宣教師であるヘンリー・ノット師に、宣教師たちは朝・夕の家庭礼拝時には膝まずいて祈りを捧げているから、その時は全く無防備であり、容易にこれをうしろから襲って皆殺しにし、彼らの財産を奪うことができる、とハゲルシュタインがポマレ二世をそそのかしたことがあった旨、告白したというのである。

ハゲルシュタインは、ビーチコウマーの一つのタイプを代表していると言ってよからう。島民になりきる、あるいは島民の側について行動し、そのくせ客観的には島民に「文明」を媒介するブローカーの役割を演じているのである。

### 5.3.2 エドワード・ロバーツ (Edward Robarts, 1771? - 1832)

1798年末から1806年の2月末まで7年と2ヶ月余をマルケサス諸島にビーチコウマーとして過ごしたエドワード・ロバーツには、自伝がある。これは彼の晩年に近い1824年に、最後の居住地インドで書きあげられたものである。長らく印刷に付されることもなく、エディンバラの国立スコットランド図書館に原稿が収蔵されたままとなっていた。それが150年ものちの1974年にいたって、メルボルン大学の歴史学教授グレゴリー・デニングの手によって初めて、綿密な校注を施され、詳細な解説付きで公刊される運びとなったのである (Denning 1974)。

世に自伝と称するものには往々にして自己讃美や自己正当化が施されていたり、そうでないまでも単純な忘却や記憶違いもあるから、自伝だからと言ってもその内容を100パーセント信じてよいわけではない。著者の姿勢・志向を知るだけならばそれでもよいが、もし敍されている「事実」の真偽を正したいならば、関連史料との照合が不可欠の手続きとなる。幸いにしてロバーツの場合は、同時代史料が幾つかあるので、それが可能である。

しかし、ロバーツが述べている当時のマルケサスの「民族誌的事実」については、ここでは論じない。それが民族誌資料として価値高いものであることを指摘するにとどめ、この稿では、ビーチコウマーとしての彼の行動の跡だけを辿ってみることとした。

ロバーツは1798年のクリスマスの夜、マルケサスのタフアタ島で、ここに立ち寄っていたイギリスの捕鯨船ニュー・ユーフラテス号から脱走する。当時のマルケサス諸島は、チリー沖で操業する捕鯨船やアザラシ猟船の薪水補給地として利用されることが多かった。その場合、タフアタ島のヴァイタフ湾とヌクヒヴァ島のタイオハーエ湾とが泊地として最もよく利用された。たとえば、ヴァイタフ湾には、1791年から98年まで8年間に、少なくとも9隻の欧米船が立寄っている。ニュー・ユーフラテス号もそうした1隻であった。

ロバーツの脱走の動機は、ロバーツ自身によれば、船内に水夫らの叛乱の動きがあり、これに加担したくなかったので脱船したということになっている。手引きをしてくれたのは、当時タフアタ島に在留していたタマ (Tama) と称する一ハワイ島民の青年であった。彼はボストン籍のアザラシ猟船の水夫をつとめていたが、この船が1798年の2月にタフアタ島に寄港した際に下船し、ビーチコウマーとなっていたのである。

ロバーツは、タマの世話で島の一首長の庇護下にはいり、この島で1年近くを過ごす。この間に彼は、ロンドン伝道協会の伝道船ダフ号が1797年6月（と言うことは、ロバーツの来島の1年半前）にこの島に送り込んだ伝道師ウィリアム・P・クルークがこの島に残した品々を発見して、あれこれ思い悩むことになる。クルークの遺品の中にあつた日記によってロバーツは、遺品の主の名前や、彼の来島の目的、そして彼がすでに長期間不在であることなどを知る。しかし、島民の誰もがクルークについての情報を提供してはくれなかった。クルークはなぜ大切な荷物を打捨てたまま消えてしまったのか、彼はどこへ行ったのか、病死してしまったのか、それとも島民に殺されたのか。ロバーツはいろいろと思ひめぐらし、不安に駆られるばかりであった。

さきに「ハゲルシュタイン」の項で触れたように、ダフ号がタフアタ島に送り込んだ2名の伝道師のうち、1人は一夜のうちにダフ号へ逃げ帰り、残り1名だけが1年間辛抱したもの、彼もまた結局はポートジャクソンに引き揚げて、マルケサスでの布教は完全に失敗に終わった。この、後者の伝道師がクルークであった。ロバーツはそうした事情を知るよしもなかったのである。

タフアタ島に1年近くを過ごしたのち、ロバーツは北に隣接するヒヴァオア島へ渡り、さらに北のウアフカ島を経て、彼がマルケサスで最も長く住むことになるヌクヒヴァ島に渡る。このあたりの経緯については、残念ながら彼の自伝に年月の記載がないので、それぞれの島にどれくらいの期間過ごしたのか不明である。しかし前後の事情から推して、ヌクヒヴァ島への渡島は、おそらく1800年中のことではないかと推定される。

ヌクヒヴァ島では2人の欧人ビーチコウマーと交渉をもつことになる。その1人はボルドー生まれのジャン・バティスト・カブリ (Jean Baptiste Cabri) という名のフランス人の若者であった。彼はもともとロンドン号というイギリス船の水夫であったが、1799年の3月にロンドン号がヌクヒヴァ島に立寄った際、どうした理由からかここで下船させられて、以後ビーチコウマーとなったものである。当時イギリスとフランスが敵対関係

にあったためか、ロバーツは終始悪意を以ってカブリのことを語っている。ヌクヒヴァ島でのカブリは、島民風に顔面を含めて全身に入墨を施していた。

もう1人のビーチコウマーはウォーカー (Walker) という名のイギリス人である。彼はアメリカのアザラシ猟船の水夫であったが、この船がヌクヒヴァ島に船がかりしたおりに、カブリにそそのかされて下船したものである。同じイギリス人同士ということもあって、ロバーツは彼とは親しくつき合っている。ウォーカーはその後危うく島の内戦に巻き込まれそうになったが、ロバーツに救出されて、1801年の4月にたまたまヌクヒヴァ島に立寄ったアメリカのアザラシ猟船ミネルヴァ号で島を脱出した。

さきにも述べたことであるが、このころのマルケサス諸島には、けっこう外国船の訪れがあった。ロバーツの住むヌクヒヴァ島のタイオハーエがその主要な寄港地であった。それと知ってロバーツは、それらの外国船の水先案内人兼薪水補給の斡旋人になろうと志し、かねて安全な水路と錨地の調査を試みていた。その甲斐あってか、彼は前記ミネルヴァ号と1803年に来航したニューヘヴンのワン・アイディア号の船長から、それぞれ、ロバーツが信頼できる水先案内人であり、かつ薪水補給の請負人でもある旨の「保証書」を入手した。このときまでにロバーツは入墨こそカブリのように顔から全身にわたって施してはいないものの、島民風に禪一丁裸体で、日焼けもしていたので、その風体では欧米人の信を得がたいと考えたからである。

1803年にはもう1隻、コンコード号というアメリカはセイラムの捕鯨船が寄港している。しかし、この船は水夫が不用意にも島民の1人を虐殺したために、ロバーツから薪水補給を拒否されて、早々に立去っている。ロバーツはただ欧米船の便宜を計ればそれでよし、としていたわけではない。彼は島民の味方であった。そうでなければ身の安全の保障がえられないことを十分承知していたからかも知れないし、あるいは、すでに心情的に島民になっていたのかもしれない。

彼はヌクヒヴァ島で深刻な飢餓を体験している。熱帯の島というと高温多雨を連想しがちであるが、マルケサス諸島はほぼ南緯10度の赤道寡雨帯に位置し、年によっては極端な降水不足に陥る。3年近くほとんど雨をみなかったこともあるといわれる。こうした年には主作物のパンの木をはじめ植物はほとんどすべて枯死し、住民の餓死者も珍しくなかった。ロバーツは、彼が体験した飢餓のおり、ある12人家族で11人までが餓死したという例をあげている。ロバーツ自身、骨と皮ばかりに痩せ衰え、歩行困難にまで陥ったという。

このとき彼を救ってくれたのは、ウアポウ島の一首長であった。ウアポウ島はヌクヒヴァ島のほぼ真南に位置する小島で、ロバーツはそれまでにウアポウ島を訪れたことがあり、そのときにこの首長の知遇を得たのである。たまたまヌクヒヴァ島にやって来た彼が、餓死寸前のロバーツを見だし、当時飢饉から免れていたウアポウ島に連れ帰ってくれたのである。

数ヶ月の滞在で体力を回復したロバーツは、再びヌクヒヴァ島のタイオハーエに戻る。彼はここに住む大首長ケアトヌエ (Keatonnue) とかねて昵懇の間柄であったが、このときすすめられてケアトヌエの妹と結婚した。彼がそれだけでに島民のあいだに信用をえていたというか、島民化していた証と考えてよいであろう。彼は一時的な「現地妻」として彼女を迎えたのではなかった。1806年に最終的に島を脱出するときにも、ロバーツは彼女をともなっているのである。彼らは互に終生の伴侶であった。

1804年5月、ロバーツはこれまでにない体験をする。捕鯨船でもアザラシ船でもない、ロシアの軍艦を迎えるのである。日本に通商を求める遣日使節ニコライ・ペトロヴィッチ・レザノフを乗せたアダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン少将を指令官兼艦長とするロシア軍艦ナデジュダ号と、ユーリー・フォードロヴィッチ・リシャンスキー大佐を艦長とする僚艦ネヴァ号とである。前者には博物学者ゲオルク・H・フォン・ラングスドルフほか数名の科学者と、私どもには決して見落とすことのできない4名の日本人も乗船していた。

この4名の日本人というのは、仙台藩領石巻の廻船若宮丸の漂流民である。若宮丸は寛政5 (1793) 年に江戸へ向けて航海中を難風に見舞われて漂流に陥り、アリューシャン列島に漂着後、島民に救われてロシア人役人に引渡され、以後9年余をロシアに過ごした。当初乗組16名中、死者、病人、残留希望者をのぞく4名が、レザノフに伴なわれてナデジュダで日本への帰国の途についたのである。

ナデジュダ、ネヴァの両艦は1803年7月19日クロンシュタットを出帆、大西洋を南下して1804年3月3日ケープ・ホーンを回って太平洋に出る。5月7日、ナデジュダ号がヌクヒヴァ島のタイオハーエ湾に投錨。4日遅れでネヴァ号も到着。5月18日にハワイに向けて出帆するまでここに碇泊し、薪水を補給するほか、ヌクヒヴァ島の博物学的・民族学的調査をおこなう。ここでロバーツの出番となるのである。

さきに触れたように、ロバーツはかねて2人のアメリカ人船長から、彼が信頼できる水先案内人である旨の「保証書」を得ていた。カヌーでナデジュダ号に漕ぎ寄せたロバーツは、艦長クルーゼンシュテルンにこれを示すことによって、以後彼のために安全な錨地への案内やら、島の女性との交歓（いわゆる売春交易）の世話やら、薪水補給、さらには博物学的・民族学的調査のための道案内や情報提供など、いっさいの便宜をはかることとなるのである。

ロバーツが嫌っていたフランス青年カプリもまた、クルーゼンシュテルンらのマルケサスに関する情報収集に協力する。クルーゼンシュテルンと博物学者ラングスドルフ、ネヴァ号艦長リシャンスキーの三者が、それぞれ航海記を著わしているが (Krusenstern 1810-1812; Langsdorff 1813-1814; Lisiansky 1814)、それらのマルケサスに関する部分の記述は、ロバーツとカプリの提供した資料にもとづくところが大きい。

ただし、その際、クルーゼンシュテルンはロバーツに、ラングスドルフはカプリに依

扱するところが多かった。しかし、兩人とも人間的にはロバーツをより信頼し、ロバーツには天性の知力とより文明的なマナーが具わっており、島民に強い影響力を有していると評価している。

なお、さきに述べたように、ナデジュダ号には寛政5（1793）年に難船した若宮丸の漂流民4名が、日本へ送還されるために同船していた。彼らの10年近くにおよぶ異国体験・見聞記は、彼らの帰国後聞き取りに当たった仙台藩の蘭学者大槻玄沢の手によって、文化4（1807）年に『環海異聞』の題下にまとめられているが（大槻他 1986）、これにはロバーツとカブリのことが出てくるものの、ロバーツの自伝にはなぜか4名の日本人について触れるところは全く無い。

5月18日、ナデジュダ号は足かけ12日におよぶタイオハーエ碇泊を切りあげて、僚船ネヴァ号ともどもマルケサス諸島を後にする。

ロバーツもカブリも別れを惜しみにネヴァ号を訪れていたが、カブリは下船のタイミングを誤って、そのままカムチャッカのペトロパヴロフスクまで運ばれ、ここから「文明社会」へ復帰することになる。

ロバーツはなお2年近くをスクヒヴァ島に送ったのち、内戦に巻きこまれ、互に敵対する彼の友人双方の板ばさみとなり、身の置きどころを失ってついに島を脱出することになる。1806年2月末、島に立寄ったイギリスの私掠船ルーシー号に妻子ともども身を寄せ、タヒチに向かうのである。そのあとは転々と在所を変え、晩年の10年間はカルカッタで警察官の職にあり、1832年に死亡したもののようである。

ロバーツは自伝を残した数少ないビーチコウマーであり、その自伝はこれを編纂したデニングが述べているように、欧人との接触期におけるマルケサスの報告というよりも、マルケサスという特殊な環境への彼の適応の物語である。それであるにもかかわらず、なお当時のマルケサス社会の民族誌資料を幾分なりとも提供してくれていることは間違いないし、クルーゼンシュテルンらのインフォーマントとなることによっても、マルケサスの情報をヨーロッパ社会に伝えることに寄与したのであった。

ビーチコウマーとしてのロバーツは、前述したような知的貢献を果たした人物としてだけでなく、殆ど島民となりながらも前項で取りあげたハゲルシュタインのように徹底せず、白人の航海者のために積極的に奉仕するばかりか、ついには島を脱出して「文明社会」に復帰してしまうのである。

### 5.3.3 ウィリアム・マリナー (William Mariner, 1791-1853)

ロバーツ以上にヨーロッパ人との接触期におけるポリネシアの社会と文化に関する信頼できる民族誌資料を残してくれたビーチコウマーは、イギリス人、ウィリアム・マリナーである。

ただし彼はロバーツのように自伝を残したわけでもないし、彼自身の手で民族誌をま

とめたのでもない。彼は1806年から1810年まで4年間をトンガ諸島に過ごしたのち、故国イングランドに戻り、ここでトンガでの体験と見聞をジョン・マルティン博士に語った。それをマルティンが『トンガ諸島土着民に関する報告』と題して1817年に出版したのである (Martin 1817)。

マリナーは15才のとき、イギリスの私掠船ポート・オウ・プリンス号に船室書記として乗務し、1805年にロンドン港を後にした。当時敵対関係にあったフランスの商船を略取することが航海の目的であった。

フランス船を求めて太平洋を航行するあいだ、ポート・オウ・プリンス号は立寄ったトンガ諸島で一首長フィナウ (Finau Ulukalala) のためにかえって奪われてしまう。1806年11月のことである。その頃のトンガはいわば戦国時代にあたり、全群島の支配権をめぐる血なまぐさい戦乱の渦中にあった。マリナーよりも10年近く前に伝道船ダフ号で来島したロンドン伝道協会の10名の宣教師たちが宣教に失敗したのも、当時のそうした社会環境によるところが大きかった。

彼らが来島した1797年には、トンガにはすでに幾人ものビーチコマーがいた。そのすべてがオーストラリアのニューサウスウェールズから脱走逃亡してきた脱獄囚であり、多くのものが保身のために有力な首長に加担して、火器をはじめヨーロッパの製品を欲しがる首長にそそのかされて、ヨーロッパ人同士で醜い抗争を繰返す始末であった。首長間の内戦に従軍したことはもちろんである。宣教師の1人ジョージ・ヴェイソンは、来島後ほどなくして棄教し、島民の女性3人と同棲して首長フィナウの手下となってしまった。内乱の巻き添えを喰って宣教師の3人が殺され、残りの6人も1800年の初めに寄港したイギリス船で逃げ出してしまい、ロンドン伝道協会の布教の目論見は完全に失敗に終わった。

島民化して一人残ったヴェイソンは、ときにフィナウの遠征に従軍するなどしてフィナウの信頼が厚かったものの、フィナウの野蛮さに終に絶えきれず、6人の宣教師が逃げ出して一年半後の1801年に、彼自身も寄港船で島を脱出している。結局、ヴェイソンは島民化したつもりでいたものの、真に島民にはなりきれなかったのである。

話をマリナーに戻す。マリナーの乗るポート・オウ・プリンス号のクルーの大半は、フィナウとその配下によって撲殺されたが、マリナーを含めて若干のものは助命された。これはフィナウが船中から奪ったマスケット銃と8門のカロネード砲とを操作させるためであった。カロネード砲というのは、当時海戦に用いられた砲身の短い大口径砲である。

マリナーたちは、島民の大工に作らせた4台の台車に据えた4門の砲をもって、フィナウ軍に加担することになった。攻撃の目標は、トンガタブ島のヌクアロファ (現・トンガ王国の首府) に築かれた、これまで難攻不落を誇ってきた砦である。この砦は高さ3メートルほどの芦の壁と深さ4メートルの濠をめぐるし、所々に望楼 (戦闘台) を設けたもので、11年以上も外部からの攻撃に耐えてきたものであったが、カロネード砲の前には

あえなく破壊し尽くされ、およそ350の戦死体を残して敵は敗走した。

フィナウ首長は大砲の威力に驚嘆し、これを操作したマリナーとその仲間の功績を賞賛したものの、この新しい戦力・戦法もフィナウの勢力を従来以上に拡大させることにはならなかった。というのは、ひとつには、カロネード砲が重すぎて運搬に困難が多く、ときに助けになると同じくらい戦闘の邪魔にもなったからである。トンガの従来の戦法ではゲリラ的な白兵戦であった。その二は、フィナウ首長には、たとえ個々の戦闘に勝っても、その勝利を次の戦闘につなげる戦術・戦略思想が欠けていたのである。彼は一局地戦に勝利すればそれに満足して、敵からの攻撃がない限り当分は戦いを休んでしまうのである。それにフィナウには、何よりも多くの人びとを統治する「組織」や「制度」を創るという発想も無ければ、そうした面で彼を支える人材ももたなかったのである。マリナーたちビーチコウマーにも、そこまで積極的にフィナウに加担する気もなかった。それにマリナーは、当時まだ20歳にも満たない少年にすぎなかった。

この間、マリナーはフィナウに気に入られて彼の養子となる。そしてフィナウの妻たちの1人マフィ・ハーベ (Mafi Habe) がマリナーの教育係となって、彼にトンガ語とトンガの風俗・習慣を詳しく教え込む。彼は語学の才と卓抜な記憶力とに恵まれていたものとみえ、トンガの社会と文化に関する正確で豊富な知識を身につけて帰国し、それをマルティン博士に語ることができたのである。

マリナーがトンガを離れたのは1810年フィナウ首長の死没直後のことであった。かれもまたトンガ人にはなりきれなかったのである。ロンドンでマルティン博士にトンガでの体験と見聞を物語ったとき、マリナーは21才であった。その後彼は商人に雇われて会計係となり、さらに株式仲介人に転身して裕福な生活をエンジョイしていたが、1853年のある日、テムズ川でのボート事故で溺死した。

マルティン博士はマリナー提供の情報にもとづく前記の編書を出版後、かつてマリナーと同じポート・オウ・プリンス号に見習い船員として乗務し、フィナウ首長に助命されてトンガに2年11ヶ月過ごしたのち、マリナーよりおよそ13ヶ月早くトンガから脱出したジェリマイア・ヒギンズ (Jeremiah Higgins) という青年の存在を知る。そこで彼の情報をマリナーのそれにつき合わせることによって、マリナーにけっして嘘や誇張がなく、しかもヒギンズより一層広く深いことを確認するにいたるのである。マルティンはその経緯を1818年刊の第2版の序文に詳記している。

マルティンのこうした試みを経て、マリナーの情報にもとづくマルティンの編書は、ヨーロッパ人と接触した当時のトンガの社会と文化を伝える第一級の史料としての地位を獲得したのであった。

ビーチコウマーには、その意思とはかわりなく、こうした文化的貢献を後世に果たした場合もあったのである。

## 5.4 むすび

以上、ハワイのジョン・ヤングを含めて4人のポリネシアのビーチコウマーの、所業のあらましを眺めてきた。以下にはそれを比較しながら、彼らが演じてきた役割を再度総括して本稿の結びとしたい。

まず時代状況である。

4人がビーチコウマーとなった時期は18世紀の90年代から19世紀初頭にかけてであって、ヨーロッパ人による太平洋の探検航海の時代がほぼ終り、しかし、領有・植民地化の動きにはまだいたらず、市場開拓とまでもいかぬいわば資源探索と、新しく〈発見〉された島民のキリスト教化を志向した時代であった。そうした目的のヨーロッパ船が、それまでとは比較にならぬ頻度で島々を訪れ、島民と接触をもつようになった。

同じ時代、ポリネシアの島々では軌を一にして小さな首長国が林立し、互いに覇を競い合っていた平和裡にせよ抗争を通じてにせよ、白人との接触を介して白人のもつ火器の威力を知った首長たちは、この新兵器をこれら操作できる白人もろとも獲得して、自らの戦力の飛躍的増強を目論んだのであった。

ヤングもハゲルシュタインもマリナーも、そうした状況下でビーチコウマーとなり、首長の野望にこたえる形で首長の好遇をえた。ただ、ロバーツだけが、その自伝に見るかぎり、火器とは無縁であるばかりか、首長間の争いにも加わっていない。むしろ、どちらかに加担することを避けるために、島を脱出しているのである。しかし、その彼とて決して首長連中と疎遠だったわけではない。一首長に奨められてその妹を妻に迎えているし、飢饉に際してある首長に救われてもいる。彼はある特定の首長とだけ親交を結ぶのではなく、その首長とも良好な人間関係を保っていたと思われる。その点が他のビーチコウマーとの最大の相違点である。マルケサスの特異な政治状況によるものか、あるいはロバーツの性格が然らしめたものなのか。

ロバーツは島民に同化しつつも、来航する欧米船のために積極的な協力を惜しまなかった。水先案内をつとめ薪水補給の手配をし、通訳を買って出るほか、島の調査を企てる者には道案内のほか各種情報を提供し、結果的に当時のマルケサスの博物学的・民族学的事情を欧米社会に伝達する上に寄与した。

ロバーツと正反対の生き方をしたのがハゲルシュタインである。彼はポマレ首長にのみ忠誠を捧げ、白人の来航船と積極的に交易したのも、火器をはじめとする「文明品」を入手することで、ポマレ首長の勢威を拡大しようがためであった。ロバーツのように、白人に資するためではなかった。それで、キリスト教伝道師のように、即物的なメリットをもたらさぬ者に対しては非協力的で、ましてや伝道師が火器の交易を妨害するにおよんでは、敵対的さえあった。ビーチコウマーとしてのハゲルシュタインは、終始ポマレの側に立ち、それに徹してタヒチの土となったのであるが、「文明」の窓口としての役割を演じたことも事実である。

土地の首長に加担し、ヨーロッパ製の火器をもってこれに奉仕し、そのおかげで好遇に恵まれたという点ではトンガにおけるマリナーもハゲルシュタインと大差ない。しかし、マリナーは首長に養取され、家庭教師までつけられて土地の言葉はもとより風俗習慣の一切を教えこまれ、つまり完全に島民化することを首長に期待されたにもかかわらず、終に島民となりきれずに生国のイギリスに舞戻ってしまう。来航船との交易にかかわらなかった点もハゲルシュタインとの違いである。

しかし、帰国後恰好の学者とめぐり遇ったことにより、当時のトンガが社会に関する第一級の民族誌資料を残すことができた。この点ではマルケサスのロバーツと同じである。

こう見てくると、ハワイのジョン・ヤングがビーチコウマーとしていかに特異な存在であったかが一層よく理解されよう。彼はカメハメハの戦力に貢献したにとどまらず、より次元の高い戦略・攻略両面でカメハメハを助け、ハワイ王国の統一を成功に導き、子孫にいたるまで王国に枢要の地位を占めさせるにいたったのである。カメハメハの人を見る眼の確かさと、それにこたえるヤングの才幹とが相俟っての結果であった、と言ってよからう。

さきに触れたように、所業はもとより名前さえ知られずに歴史の底に沈んでしまったビーチコウマーは数多くいる。ここで取り上げた4人のポリネシアのビーチコウマーは、名前も経歴・所業のあらましも知りうる、むしろ稀な存在と言ってよい。

しかし、その彼らとて、ヤングを除けば、決して歴史の表舞台に姿をあらわすことのない、いわば黒子のような存在にすぎない。歴史の表舞台に登ったビーチコウマーは、ポリネシアの場合、ヤングだけであった。ヨーロッパ人との接触期のオセアニア史上、一定の役割を演じながらも蔭の存在にとどまったのが、大多数のビーチコウマーだったのである。